

宴会の常識

―初めての宴会―

井口昭久

大学に新入生が入ってきた。

「私、よねやまっつていうの。親にサー、似てないって言われて」「私、おがわっつていうの。父親に似てるって言われる」

新入生を少人数に分けて大学生活の基本を指導する。基礎ゼミという。そのゼミの学生たちが指導教官にお願いして焼き肉屋でコンパをやった。お願いされた指導教官は私で、彼らにとつて初めての宴会であった。お互いに知り合ったばかりで、冒頭の会話は、隣に座った学生二人の自己紹介である。

私が宴会場に着了いた時、学生はいなかった。私が待っている所へ学生たちがぞろぞろと到

着して勝手に席に座った。先生のいない小学校の教室になった。放置しておく庭に無秩序に草が生える。雑草のような学生たちに宴会の常識を教えなければならぬ。

宴会の常識その1 先輩よりも早く会場へ着くこと。遅くなったら、「遅くなつてすみません」と挨拶すること。

飲み物が置いてあったので学生たちは勝手に飲み始めた。私が、「乾杯しなきゃー」と言った。一瞬静かになった。そして、それぞれに「カンパイー！」と、叫んだ。

常識その2 乾杯の音頭は誰か一人が口火を切るものである。そしてその人は普通は一

番年上の人がする。

私がビールを飲んでるのを見て「えー、お酒飲むの先生だけ?」「うっそう。ひきょう、せこい」。

常識その3 君たちのような18歳は未成年という。この国では未成年者は酒を飲んではいけないことになっている。私が酒を飲めるのは、ひきょう者だからでも、せこいからでもない。ただ未成年ではないだけである。

髪かみの長い女の子が私をじつと見つめていた。頬ほが紅色べにいろだった。私に何かを訴えたくてじつと私を見つめていた。目が合うと、彼女は言った。「お肉追加してもいいですか?」

「私、塾じゆくの教師のバイト始めたんだけどさー。近頃の子供全く駄目。お話にならない。だつてさー、-8+9マイナスプラスがどうして1になるの? って聞かれるんだよ。線を引いて、教えてやっても、どうして? って言うんだよ。英語でもサー。動詞と主語がばらばらなんだよ。主語の後に動詞だつて教えても、どうして

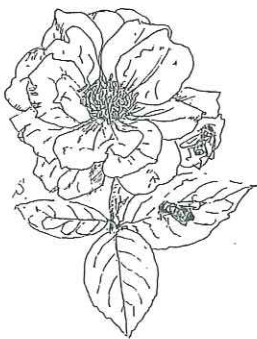
? っていうんだよ」

常識その4 隣に座っている教官にわけの分からぬ話をしないこと。

私は退散することにした。「さよなら」と言うと、「マジで、それじゃ新しい肉、頼めんじゃん」。

朝顔は朝に咲き、夕顔は夕方に咲く。花は地上に咲き、鳥は空を飛ぶ。君たちは、地球上の生物はそうやって限られた空間と時間を分け合っていることを知らなければならぬ。どうして? って聞かないで。

でもサー! みんな可愛いね。



井口昭久 1943年長野県生まれ。名古屋大学医学部卒業後、同第三内科入局。愛知医科大学講師などを経て'78年ニューヨーク医科大学留学。'93年名古屋大学医学部老年科教授。名古屋大学医学部附属病院長を経て現在、愛知淑徳大学教授、名古屋大学名誉教授。『鈍行列車に乗って―医者人生ソロソロ帰り道』(風媒社)など著書多数。